

追悼 盛下 勇 先生を偲んで

石田 秀樹 (島根大学)

原生物学会の前身である原生動物学会の立ち上げにも関わられた本学会名誉会員の盛下 勇 先生が、2022年5月20日に逝去されました。先生の訃報に悲しみと喪失感を禁じざるを得ません。生前のご厚情に深く感謝いたしますとともにご功績を偲んで、追悼文を捧げさせていただきます。

盛下先生は横浜国立大学で原生動物学を学ばれた後、水質管理にかかわる民間企業(荏原製作所・荏原インフィルコ)において、原生動物学の観点から水質管理を実践してこられました。その後、環境調査技術研究所を設立され、ご在職中は全国各地の水質改善に携わられました。その間、全国的に大きな社会問題となった宍道湖・中海の淡水化事業においても水質・生物相変化予測などに関わられ、水質環境の保全に多大な貢献をされました。2000年に荏原総合研究所顧問を退かれるまでの44年間に多くの技師を育成され、技師の学術・技術レベルの向上にも努められました。また、1976年には第10回原生動物学会大会長を務められるなど、原生動物学会の活動にもご尽力されました。御退職後の2001年には建設省土木研究所に研究員として招聘され、継続して原生動物の種組成の分析に取り組みられるとともに、この分野の技術者への指針となるようにといくつもの著書を出版されています。代表的な著書としては「下水処理と原生動物(山海堂, 2004)」や「応用原生動物学(山海堂, 2004)」などが挙げられますが、これらの著書では、下水処理場における活性汚泥中に生息する原生動物の水浄化への関りについて、原生動物が有機物の分解の進み具合を示す有効な指標生物であることなどを示され、さらには原生動物の正確な分類などについても多くの指針を示されました。また、全国各地の湖沼や下水処理場などに生息する原生動物の観察依頼と水質改善についてアドバイスを求められ、北は北海道から南は沖縄まで、それぞれの地域に直接指導に出向かれて、採水から観察法までを一から指導されました。そして、原生動物を用いた水質判定の有用性特に低コストでありながら有効性が高いということが今後の時代に必ず評価されるようになるとおっしゃっておられました。長年の活動は実を結びつつあり、近年になって物理的な水質分析一辺倒な状況から再び生物を使った水質判定法が脚光を浴びるようになってきたと喜んでおられました。私たちがこれを引き継いで、さらに有効性の高さを広めていかなくてはならないと思っております。

先生は常に正確で迅速な種の同定を心がけておられ、愛用のオリンパス顕微鏡と写真撮影装置は御退職後も大活躍で、小さな不具合をこまめに修理しながら

長年使い続けられておられました。先生は、常に出現種を撮影し記録を残しておられたのですが、近年のデジタルはどうしても階調性が劣るのでフィルムに限ることでした。私が、同定の出来ない不明種の観察をお願いすると、いつも快くお引き受け頂き、そのうえ、大変楽しみにしているから次も送ってくださいとおっしゃってくださいました。そうやって、こだわりにこだわって同定して下さった様々な種と写真は私の貴重な分析データとなっております。

また、先生は学生の指導にも大変力を入れておられ、北里大学、東京水産大学、北海道大学、宮崎大学、琉球大学等様々な大学で非常勤講師を務められた他、私の勤務する島根大学にもわざわざ出向いて下さり、学部学生にまで繊毛虫種同定の手ほどきをくださいました。学生たちは最初は大変緊張していましたが、先生のあの優しい笑顔で丁寧に説明して下さる様子に緊張も解け、次はこれも見てもらいたい、あれも見てもらいたいと大盛況の観察会となりました。島根大学での観察会と同じように各地で時には下水処理場の技術職員の方、時にはダム湖管理職員の方、そして子供たちのイベントなどでも丁寧に指導をくださいました。先生には観察の手法や分類の着目点などまだまだ教えて頂きたいことが多くあり、コロナの状況が落ち着いたらまた島根大学にも来て頂くことにもなっておりました。その中での突然のご逝去は本当に残念でなりません。先生のご功績とご恩に感謝しつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



2020年度日本原生物学会「教育賞」を受けられた時の盛下 先生と春本 会長(当時)